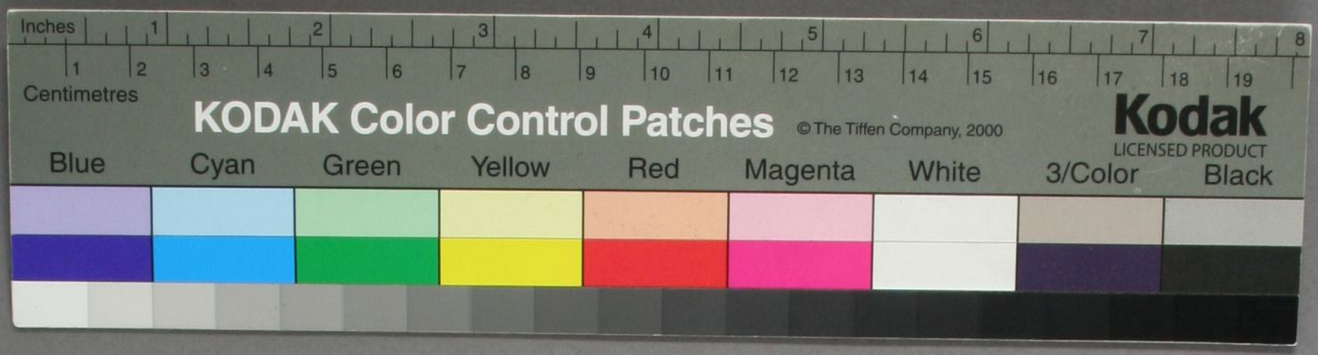
Inches
Centimetres
KODAK Color Control Patches
© The Tiffen Company, 2000
Kodak
LICENSED PRODUCT
Blue
Cyan
Green
Yellow
Red
Magenta
White
3/Color
Black

中村俊定文庫
文庫 18
413

宇村俊定文庫

寶暦十四年四月十三日於鼓林寺開阿蒲亭興行

懐舊之誹諧

いくとせの讀かわり霜の花　涼花

形見いきくとねぶる松　丈石

寒き水何とうちわく　百花

出在家とうたふ絶句五軒　貞右

酒林人まちまく裏新　守大

菊の色中の月いざ月　巨江

紅葉をふみ西山も　五葉

靡よふ時雨うつん　閑我

初蟬のまだ鳴とよめるも
女乃誉る風呂のわり場　此通
うつくしい良妻も勝る仏かな　車用
あつさ琥珀の塵をそよ欲　百尺
弐日の座鋪よあそよ乃掛　五株
牡丹雪うき雨い晴彩　婆足
聾も聞ゆるさそう郭公　桃水
廿日の月の船も牧方　奥雫
發しかの柳や氣力そうそん　薇牛
物よおろさまを秋を感そる　百余

家ぬいなうそうそ出そうと　北丘
うそそ左見まるる花も場　雄飛
下戸上戸根そそそる花も場　雪航
とろそも見事藤やム吹　巨舟
二名もそそね小鳥囀る川岸よ　為山
仏も日和ク宮先そう　野史
おりろい旅をそいそを雇いそく　麥里
五蓋よ世間よ出来ら限　蒙之
ゆ数いまつまそ出来ら限　如矢
萩おろうしそそそ朝起　歌風

あつまる蚊のまつこツ黒き月　素山
いやな無い　何ぞ　窓　夜　倚天
出うやそくよ嫁入をする君よ　南路
雛の事も男文面影　五粒
後扉風の桃も猶も今盛　梅暦
霞よはやく京のむく　子逸
猛者引の書いた紙園のとを書て　几睡
あつく扇の風のなつきよ　鬼角
降さうか時よふるぬも雨のこと地　如玉
客い賞つくやり　傾城　利萬

ふるを枕よ神やおいとさん　撫泉
いまく生生のとの鳥うくなり　矢直
移る世間の初めの墨くるよ　丈士
富士見移つく後い殿様　贅枝
変らまさるい極めくよい日柄　其梅
めそさう幼よ其名を成よう　涼花
やうくと實柚の蓮の咲初く　丈石
寺挨拶の一ツ涼風　守大
發明をあつと驚鼻節ゝ　百天
うふもまふを事　鬼遊

花の幕ともをく出る月よ　車用
暮にく鐘いと哀なれ聲　桃水
谷の戸よ戻る鶯　夏近し　蓼足
ちこれ草鞋のあき馬市　雪舫
いつの世よかく朽てしこ王門　巨舟
老行く矢より鉄砲　撫泉
腕業も奏もこころもなきの杖　蒙之
障子あれいろいろ一面　南路
木くを吹風老つまつく雪よ成　野史
ためよい飯よ猫のくつさえ　百尺

そこらねくのそく鄰い美濃迄江　矢直
蛸の田を刈ル伯父も有ル　丈石
連老さま相撲も有ル人なる　百余
月も夜通いそうのゆく空　如壺
暑うる船よ漸さむさ　利萬
いつくもせいしー来をす音　蓼之
下女とう名い有ル物の名も　涼花
安幸の哀のの度もそうう　蒙之
借銭をそぬよ杉や春をまち　丈石
蜂のもろの言葉聞よ谷口　車用

人よ先初穂の赤つら哉　守文
賢夫のおもり社や神まつり　亘舟
短夜や灯籠の火も消さけり　桃水
あくひのたまる念仏　野史
芦の音いやうつくしき浦の秋　鬼遊
薄もまきも忠妻来訪　百余
鼈甲の型なつかしき窓の月　南路
茶の味い花香ありとも　涼花
唐までも志ん都の水のさ　撫泉
いつの受領を大和なりと　丈石

旅芝居初日をしみて鳴呼ほ　雪航
ありうと見てくる村の口笑　矢直
もの多さの長いも作法を言　如盃
抱て寝よいい仕合をくあん今霄　車用
そふうをかこつけみてくあん今霄　南路
月の美食いたもうふし　守大
患ひあり夜露まうく女郎花　雪航
燭をもてぬ谷川のあ　丈士
よい持竈をうる学文す　百余
年をつくいまも称もうる　涼花

迎年よ笑ふ麦の実のいろや　巨舟
門うつくしい葉　柳　巷　野史
織機の音ふそくと夕暮よ　撫泉
替うまいくそく納る籠き　蒙之
人うる種や翌ん實語教　矢直
もと病よ休まれぬ伽　兎遊
さひしさの相もうる火鉢の火　百尺
雪の佛も坊の什物　桃水
作う湯く世のくい何のその　利萬
除まよ落まぬ蝶くの衣　麥里

仕合や久ふよあ光の花くろ　夫石
若葉幾ま代の玄　麥足

懐舊

翁くく五くの年回千載堂のをりよ
ゆもひくうあ恩を謝をる事九年一毛の志を
多加くや其き年月の雪の梅　練石
芦花翁九五回よ
業神の浄地めぐれ仰之梅　隆志

芦花翁先生廿五回忌の牌前より傳

芦花の名いみじく經てもなほ枯さらき　普求

懷舊

そこゆのまもる輪そやし雪佛　信舟

月

耶郭の爰いみそかときまつ　臣石

きそしちまま先生ち書翰をみく先師の

ち形ち名ち残るの一変実得

遠忘ち自ちをよ忘るまれあへを

一聲の其露いろぬ郭公　百花

歌仙

何因公

花あれや老木も雲の道ちへ　百川

雀のまゆめるかりうひを　撫泉

ふいまち垣根を雪のち消く　吐酒

陳る家ち庵ちろなり　盆景

月のもるまそその伽よい虫の聲　鬼狀

萩もそまも露よ思いろ　振衣

かりさの身ちこもやむ系　押舎

陳まりつ糊ころまる

浴うく髪も掃ふせ伽羅も焚　角子
きゝその仏婚後の家　可文
おもふ欲神まちやく姉娘　楚桃
徘徊を松いたや年の宿　露由
深しさの迎つゝみ湖の月　素柳
蛍よ錫をかくる石山　兎角
世を磨き深きまゐい綱代笠　眉山
降まゝく沽む後室　石甫
庵ゝのそ掃き粧せく　百工
りく笑といまん簗と　桃水

裏あいもも催よもなくまゝ　雄飛
そやしおうく夏よ如行　丈石
風を褒かもゝく園扇褒　孤遊
物憂よる駕籠のけ香　周公
篤原よ叙あゝをせといけ野辺　川
笑のへゝく早稲よ羊よ　泉
容姿の名をいい月見待て　酒
耳ういやゝと鹿のゝく　魯
とおろし栗のわゝ毛や椎の雨　狀
美食すゝ杜家の裏町　衣

水多のうい汐時〳〵よ　舎

世を捨人の奇よ富多り　示右

況阮袋を出をや枯松葉用ゐ

長途のそろ〳〵減さは杖　柳

夏そそも酒の醸よい会入く　角

糸そそろそ見そめ肥肉　其童

音楽の雪いき美よ花くそり　由

云ひ集糸のうめうらさ　執筆

東六條連中

花

花の都多花と花の宮古歌　露由

御代の花そ十日を盛多る　雄飛

もろまでや住る雨てても花の変

様とう美うやまし花盛　柳舎

曇ふとくり降よ花の雪　仙魯

経天よ日の花もろ多　鬼狄

多人も花よろ〳〵揺将　撫泉

美盛雲雀もまでうろ多　示右

守る人いさそ見飽へき花の時　楚桃

多く種も作戸の花見そもろまき　石甫

尼

風ゝ寒くさそて笛きこよ花　萬人
傘人もいそうや花の頃　百工
　郭公
名揚くや聲きろ〳〵郭公　露笛
降てくる雨もものう〳〵なきます　雄飛
春め人も待ことをきく杜宇　振衣
待おかを寝ぬそよきほとゝきす　撫泉
いく聲とかへていく〳〵郭公　示右
待や故の恩よりなけよる親　楚狐
一聲やなくきるく人の夢　石甫

紅〳〵のさそて夜半の子規　其童
さてもあく〳〵鳴ものう郭公　萬人
杜鵑なるけう経もよ免　百工

　月
十六夜の月いつ夏う頼母月　露笛
夕立の夏いもの月今宵　雄飛
月の照天津一刻あら〳〵何　狐遊
白物よけつまついるを月をよ　兎狀
ある月の素顔やもろかいこゝ　岱嚢
生頃やうく春きくの月　楚狐

もむ月のよさを濁一つ　石甫
後夜の鐘を聞ふ月見客　其童
こうまよてつうちを秋の月　萬人
漬人の名よ老う名月の夜　百工

雪

反橋よつうもや雪のよさう　露由
何の木とそ雪のそ雪の花　雄飛
沖佛よ像う初う雪の花　柿舎
早梅よ咲勝よそう雪の花　振衣
又雪の松とよそう髪眺めう　孤遊

わうをこそ答うそれ雪の花　岱晋
うう事をそへもそへ雪うそる　百川
小枝う先咲そめう雪の花　撫泉
室咲の梅う先よ雪の花　楚桃
久の雪きのそれ日枝のそうる　石甫
うの雪やおりよそうそうき　其童
消ぬまや後のう勝ぬそうる雪　萬人
雅なの　初いそうそう雪佛　百工

懐舊

芦花翁の命日をそくく

おもひきや二十又度の事そ迄　春雄

日

恩そ〳〵ほろ〳〵の間の袖の霜　芦水

故翁二十又年のま向をそなへて雪月花

郭公を題そ〳〵句をあみ出されけるに

親し親しく

親し親しき一器量そ〳〵きく　千里

花

詠捨や花をあつ〳〵の片折戸　漣石

今生をそう〳〵や花の東山　隆志

花を封しきのこをそ〳〵まるれ　普求

花撰くやくいちくさし花使　春雄

待庵や戸ひら代の春の花　文也

郭公

下そ迫い沸ろ〳〵きた　漣石

汲ふる夏名いやよ〳〵きを　春雄

月

月しろや名を公の揚よ未開江　練石
まくそのいろまそ今霄の松の新　周石
名月や雲のうしろ月の裏　風狀
背戸の月門へ物出る田舎哉　春雄
新そうな名を遠をかまき月　十口

雪

雪まくやえぬ世の友を雪あそう　練石
賜や後をつくの雪のぬし　隆志
日のおへ行まそ今朝の雪　春雄
そうそうやまそいせ露を降やう　文也

四季題を題そかるわうそれそう
月雪を雪そまそ月かそきを　湘南

花

う野ふよのうそう

松よ月をやをめん花のう　野山　帰厚
九重の雨を明しや花　霞　有口

月

いこのさ海と月よりや名のふ色　桃葉
照月やこえの橋の人の影　金獅
長者を貧者ふ楽し窓の月　柳枝

名月や今宵まるく虫の聲　林鷺

花

花よきいろ入相遅し日めぐ　仙子

吉野をうつす花の眠よりさめける　曉志

初花よ日見ぐい給羽減ゐる日

天地のやまつ児桜　風早町桃水

杣の斧の柄りやくちをん櫻染志

入相の鐘と花見の命ゐる比樫

見よゆくも花よ見らぐ花見哉　蘭渓

天人の森曲もあらん花の雲　遊之

神さびよみあらぐ花の雪　雨隣舎一鏡

花の滋もさ吉よ笑つ清水寺　湖山

と家もいさぬ花の踊来　花石

花の頭よ行の秋の蕾　日

ちるやう野のふの雲ちまき　一勝

郭公

なくきすちをを月よ矢変ゐる　織雨

森耳よいらぐ奢そかさきし　比樫

岩屋よゆくぐ

滝よ耳洗ぐくきん　郭公　曉志

なくきをなくや枕の煙草盆　白鳥
盲人もありくせをなくきとく　堂里蝶

晩夏郭そとふる
一聲よ風もうらやかなくきと　湖山
月花の中をうけさう郭公　柳前
隣まで雨戸あらうやかなくきた　一勝

月
枝川の月いうくの指ふる　織雨
名所の系圖うたや妹の月　憲山

風早町　桃水

俯いてくかもや月の桂川　湖山
名月や羊のみさをもなき　柳前

雪
小間や雪のふる人の声　織雨
さいしさを埋もなき庭の雪　暁志
蛇の見え隠つゝ雪の傘　月

ある人の困窮をうらやく
文学の道くうくし雪の奥　道川

久樂山人

何ともう野を埋ける雪の花の雪　染志
建長寺見る仏地うう庭の雪　比樫

旅宿雪といふことを

雪ながらもる月の影ぞ寒けき　同

雪花をもる月の盛りくるよ夢も　花石

そら雪や小まつの松の花　盛　柳前

おもひ寄る雪も志賀の松の雪　狐里

初ゆきや雨もる下屋鋪　同

其まゝよ寒いものよ木々の雪　柳枝

卯花月十三日東山何がしの寺そゝりとの

會あり　ふもとにて

其日暮くれかゝるうくひすや　六條　郭公　桃水

知石翁の年回善雁の数つもりつゝ霜

枯のかずすゝきまく其舊を懐ふ

ちる葉よ宿もしぐれて鐘細　竹斧齋　吾計

懐舊

霜雪のふるひも見ても年の名　自石

今も見つゝ十とせ年の花の名　守大

もろ〳〵やもろ〳〵い今よ彼の花　此通

今一声ほと〳〵ぎすしのゝめを　車用

なき跡のひかりや今よ秋の月　葵足

それぬよ雪のふきい通かり　丈士

秋仙

於千載堂興行

毛氈の毋よ出る庭の梅　雪舫
日よわくうつ〳〵飛石の肌　丈石
鮎のもる谷のすそ川雨るゝく　撫泉
紙書うち月ら白い菅笠　丈士
夕日の塩を去畚の旅籠町　桃水
寝よ春秋の畑の花蕎麦ちりなる　執筆
さい日の幸のほそ沸ぬ池　石
　　水

毒らう思ひお暮の巧史　士
寺いゆうく侍よ庵　舫
さいしさい覚のうと眠る春　水
燈やさいしく悉路の蚤　泉
炷売をうた猫る小侍女　月
行連の落葉い肥肉よう　石
辞さあよう冬の辺さの思れて　舫
紅葉も花よまけぬこく　水
秋とうへいの掛後の月そそ　泉
銭う寶そ住よしの市　舫

又二町行て浦多い舩さいく　石
鏡よ初ゝ海人のたく煙　泉
絶家をとよ見おろす樓よ　水
諫をいつ耳い福耳　石
哀と酒いつまおそ世の敲　舩
そゝろ文も亀所なき　士
旅の人ゝも留守るお葉ゝ　泉
衒多いい夕立うぬけ　水
雯ゝふこ信倍あつい蝉の声　石
松ふゝく表城跡　舩

月の夏今もかゝる　士
かゝる　灯よえまを露　泉
鈴虫のおくべき所祇の園　舩
古田のる場よ落るの櫛　水
野もとも家と童いあそ多　泉
日和つゝく開帳の去　士
幸ふ公の花のう陳や　石
いつも長閑よ向ふ床の間　水

花

おりろさ李白いつよ花の酔　蘇山

さけそそるあつめうつり椀　は

　郭公

入相の初鳥まぬかるゝ声　は

はるゝて鼻のこゝやかうてきそ　は

　月

幸崎や松の末まの浪の月　は

　雪

雪花い折人も庵こふ　は

　花

さくまり花もよい頃を七八分　貞右

東大寺にまうつく

松明い火こります時を初さくら　涼花

牡念うく花見る内を神ゑ　百花

花守ゝ昼寝や起を虻の声　は

筆の花おりへ迎〳〵七まりを　は

ちく花よりをり合うり花ん　守大

降さうか雲いけぬ〳〵花の雲　は

花の滝のとゝ〳〵とうれや死ぶ蝶　は

花の雲やふゝ〳〵ふゝとふゝの雲　は

花あれくと見くくあや花の幕　眸影

春掛や梢見おろす谷の花　此通
春もやまつひもすり花曇　車用
頭痛持うるむて見やる花の滝　〃
ふあらい六月よ花の風　〃
くもりそめや先取ゆふ立の顔　桃水
花待よなをくらき日の比　〃
花の滝歌をきく人もうるおう　〃
鳥よまて花の錦の幕もなし　〃
花の昼何いう相の鐘の夢　〃
暁日より業花や蝶の羨まし　〃

ひくや散や庵さうの花の山　墓里
花よりく鳴るや竹の秋の雷　蔽牛
晴うるま一花のまん陰の墓所　〃
浪槃より果をうるまき花の雪　〃
おそろしい色をたくらや花見樽　〃
持く見るいものよふ花よ女房　〃
菜畑さ見をさ氏みし一花の旅　百余
実渡城い花よ会仏よ浮世ふか　〃
待花や名をそてものうり芸　北丘
光陰をそそ氏思ふ遅櫻　〃

花のあいだの君を普賢象　正舟
初花や庚申制札のたゝめ前　野史
花見よいもうさんをのよき野杉　為山
　　郭公
籠耳もうまで聲よくまた　百花
寐くるしい夜よ命あり郭公　〃
郭公声やいかゞと梅雨の闇　守大
欲の世やけふ一声まひかとよ鳥　〃
待よまちかねたりとくまふかを　〃
雪渓よりかひをありがと郭公　五葉

鉾のあとをまもるや郭公　百大
名ある人よこゝまでうつ團のま規　〃
よい折や雨のをやみの郭公　跡影
待さ夜も更ゆく雨のをやみの郭公　〃
初おいらふん杜宇　此通
　　雲宮山よりてしきま
郭公雨のをれうや白雲寺　〃
耳と眼の根くくらん郭公　〃
郭公待あつ牧柱のか　蓼足
なくきく待つゝ鵜こゝる　〃

卯の雪と降りつゞき 郭公 桃水
きくゆてふうつせみも 杜宇 は
雉子の声とをかしう
なくきゝなせる 朝寝の業 は
郭公ないて 花ちくほとゝぎす は
きゝなれぬ聲うゆゑを 郭公 蔽牛
等とう人そ 也よなけかきた は
さらなりといふこゝろ 杜鵑 は
等の花多きうかゝきす は

その門そないて通るよ 郭公 は
一聲いふ事とつうえゝきす は
等とう人のの数多かゝきを は
菊名ところ 郭公 は
郭公 鶯いと餌ほす人さへ は
本当いかゝきを 北丘
秘とう声やこと鳥のかよゝきた 瓦舟
雉きゝこ時う初音そ多親 野史
等とうや耳まかいてほゝきを 麥里

月

名月や寐ぬ
名月やきの
名月や寐さ
名月や治郎
名月や白
世とともに
月名よ秋
挑灯や月よ
賞ぐへく見
名月や流辺江　百花
名月や松のと　日
名月や寐さ　涼花
名月や治郎の娘　五葉
名月や白〳〵月の旅　宇大
世とともにちまきれや月の良　日
月名よ秋さ　日
挑灯や月よ世をそる　巨江
賞ぐへく見勝　閑我

ひやくよ照つけて月夜か　百尺
迎いふも遠くそくりの月　蹊影
月の舟ふへのありもやそのう　此通
寐待月月あかくはんる　車用
影くく舟うかや寐ぐのそく月　菱豆
大名の挑灯そし月の昼　日
夜ふあるくく戸そ家の月寐　日
笠めけいねよい月の素敵ふ　日
楊実妃も及そのう月の良　日
月の良そ思いふくなか　桃水

[illegible]
月の良よ宍のわくを見る秋る　蕨牛
出嬬も見ろ[illegible]の月　ロ
日和ろ先参ろやし月見る　ロ
ニ〻月や誰ろ妙のろう加減　百余
もろいてもと人よ重ねろ月の良　巨舟
ろう火のわろうい賤し月の昼　野史
至月の事よ売ち園粉ち　麥里
十五夜くりうれい
出やすい月の兎の耳ろん　ロ

何百里ろう男の九ろう　ロ
久人よ月いま真向の兎ニの郎　其梅
芋の九屋わろ[illegible]ろ月見のむしろる　貞右

雪

雪よ半ときろやう忘の内　守大
朝良い粉をさろす雪のろる　ロ
ろう泡も去良雪の朝菜る　巨江
雪よ着ろく雪をあろうの旅路る　五葉
ろろも眼病い又まい雪のろ　百天

落雪や松のおもる通ふらん　車用
多くの人のかゝる行脚の跡の雪　は
幾かたに雪を積らう捨小舟　は
鴈遠一声いふけ雪の朝　は
戸の音や雪の花見のあやまち　は
一ツ屋も埋まるを雪の朝ぼらけ　は
きら〳〵雪の朝日の忘れもの　は
ちら〳〵雪や毎うち釜のたぎる音　桃水
小春日雪のちら〳〵花咲ふう　は
晴ゆく雪のあしたの村烏　は

一冬いくそもそろ〳〵紙の雪　は
持紙の濁らぬうち雪こう〳〵　は
正覚い寒さまるえへ〳〵雪佛　は
花紅葉今一ツ雪のう〳〵野分　は
雪のひや白石を碁の亭主ぶり　は
月花をもろ〳〵四方の雪　は
蓑をきて歌おもろ〳〵雪の朝　は
ふう〳〵雪踏ちらを下部ぶる　は
初ゆきや酒屋の門いまてあり　叢牛
雪のひや火鉢の炭のおこる音　は

通の記よ墨うけるや雪の秋　日
軒ふるくるのうるし夜の雪　日
雪折の音やそうそう今年竹　北丘
淡ろそそを折といん雪の花　野史
雪女ちらこと見そめて寒さうる　麥里

李村行うち
先師自筆の愛句表具しくもうとをそそ
ゆるを枝よう花のけこ木　丈石
返事よ仕脇しくれしい
ふるまめくそそる今のまま　桃水

歌仙

中垣やおひ見たるひの花こ木　雪航
蝶も来るうる室のうるひを　丈石
西あうう書の日もう城そめく　日
大空の月をむ枝川のう　航
梶の葉の添まくかる仮橋よ　日
納るあうさの登るいけ魚　石
沸(う)昊よ京の秋の第て　日
書兎灯の灸よそむ頃　航

京をそこに結ぶ髪のほつれ　日
待夜の雪いと細く降こそわれ　石
ふる雪の内よ積まる雪のみ七す　日
梅そちり迎遠列の窓　航
連立をも入院のいきの無きく　日
お見そそちいのくやるその　石
引きもる掌もみもまねくよ　日
ちくやくるうる次ふき　航
夕月夜奥まで通を文使　石
鳥も泊るう年陣の屋根　航

ふるなをそこに松夢関越く　日
舟波若狭をきくれ小ろ　石
紙屋川のあいこうる濡ふ　日
火の如石の多い真白　航
双六を流をそくまよ　日
ふ法師こそうく貴き　石
枚村の日いうるうて閑く　日
降さき夕よさりまき鷺　航
歓をも彩多うる石社　日
巡見の風まもふそう　石

夜の蔵大き月の秋哉　舫
売ものとうるる世をそうう鳥　石
食さうの桃顕のおつるうや　〃
白粉光る玉の輦車　舫
大だい人今をそうめの脇仕く　〃
雲母の猿もさくう　〃
灯籠もさくや釜本の花の雪　石
帰城を海をを岩の長閑さ　執筆

花

先さくいまの凍とけうそう椽　観魚堂雪舫

火をそうる花の油や春の雨　〃
見るい夜ひくる花を眼の仏　〃
鹿児寺をそうをみれさくう　特
たてそうや我も不動よ花の瀧　〃
山里や花よりもるき斧の音　〃
流そうしさうう岸の花　〃
入相の花のそうの根芹哉　〃

花呼人とうそうの唇うさき事　勾雪菴蘆乙
人うそう花のそうれ花の雫袋　〃

石山まうで　供の舟中にて

江のもやまより脚ある花見舟　〃

故旧の旅立ちよ

花の雲やめるとも笠も本書の坂　〃

彼岸さへ橋まで人も楽しき　〃

花や尚さふを枝の書き　〃

花

出ましひの神うま遅し　柳狩　生花堂　呉律

石山寺や年礼そこ〳〵花見客　〃

行く花よあるれさいるし古戦場　〃

宵の夜ふかひをめぐり花の魚　〃

掃きもせぬ築山たるや花の塵　〃

〃

曼陀羅と織るや花の糸柳　縁水汀　蘆舟

ちるもみうやさ吉野の花の雪　〃

〃

寺よまあ身いそまき花見哉　夏實

いをきりぬ道をし花盛　〃

飛鼠も稽うかるや初さくら　如孟

いつてもひとよあるね柳うら　〃

ちるぞうき亀なく哭や迷　椹　は
神の花人よ見をるも恵こゝる　利萬
酒ぞうしたよあひする夕ゝる　は
おしあくちくまか花のほり名　は
哭ぞうや花よえらる人の息　矢直
花い根よ戻して書よぞう　は

寄花恋

ちる花やあるぞう新婦のたゝり病　律松

郭公

待耳い何よ哭れとうかとぎすを　雪航

故眞珠庵如泉門人

命あれ今宵も啼ん郭公　は
罪いろにくゝを聲を杜宇　は
おる耳依帖裏夏る子規　は
ぬけ名を啼くく去ぞう時鳥　は
かゝる恋まくゝい捨つくきを　蘆乙
蜀魂そんや哭産鋪　は
一声や塔よぞうのほゝなし　は
鈍もる蚊　慚よあぞう子規　は
若緊山声まくさしくきす　は
声かのう耳そこそきま郭公　は

河内の死をみてうたふ　呉律
待耳よふんぬさせもやおそなを　は
梦人の耳に遠くかすきを　は
一声に奇楠とふ題よ
雨後郭公といふ題よ
今の雨ここてあてを杜宇　は
郭公そ〳〵をとる人もなる　芦舟
籐をたく函のそまや郭公　は
かとます姿に人今の麦まより　夏實
きいとものをふしを待つ郭公　は

梅雨をよ声いうものなよ郭公　如盃
近道もあ〳〵たな子規　は
伽羅の香のすゝねまや杜鵑　は
一声やあ〳〵ふ森くらき杜宇　は
降〳〵ふりにけりやかくまて利萬
一聲に何とるかをそ時鳥　は
寄鳥恋といふ題よ
辻なをよ〳〵やそ初音のかくまて矢直
よい声のねくらをしやかとます　は

月

社頭月と云題よ

造営や月もわづかの御宮はら　雪航
なで手や稲のへふくく月の雪　日
雑煮うく待おもそう月の芋　日
庵禅の眼ともぬわん月の秋　日
山寺や月の出そやを告の鐘　日
夜そろもやもすきそよの月　日
名の月花より眼青そあり　芦乙
続しるる松わそしや月の秋　日

月もまもやはらしのそく色紙窓　日
東山何ものの別荘そ
更科いかるも月の蕎麦畠　日
下嵯峨の月名ましそん
かりまろく柱へのそん月の舩　日
月の雪みるや都の富士の秋　呉律
家今る月もの宿のするや浪し宇　日
秋の光そそやをそよの月　日
蝶の巣も月まようあや松の枝　日
名月のあるよやそぬ人の壱　日

月の盛雲も花さくころひろ　芦舟
月の舩よりひく雲よゆふまぐれ　〃
もるまて月を掬ふものそ〳〵吾ゟ　夏實
雨雲や月のあそよちまき迄行　〃
社頭月とそ
古社まつ〳〵そうや月の氣如盃
唐まても能見ゆる月の宮　〃
名ゟの有る月見ふね　利萬
そけふやよかろうもく參る月　〃
年〳〵月も実の入こひろ　〃

名月のもり雲ともる笑も有ゟ　矢直
入月のあとおもふ新やうひ星　律杜

雪

眠るふの鼾のごう雪おこし　雪航
竹い寒く巣籠をまつ夜の雪　〃
降るまゝよまたたゝや雪布袋　〃
一夜さい雪と根並の契ゟ　〃
こいそゝき火よたいそあゝれ夜の雪　〃

海邊雪とゝ部よ

橋もや時絃　研歩
松の雪　芦乙

冬籠堂へ入のつくよりそろ
ひもりくる又漕乃や雪の舩　ハ
跡くそひ元といろま庭のゆき　ハ
わわひ庵よ芭蕉の雪女　ハ
　　ふ人もそうれい
籠のわれそのそそ雪の友　ハ
張そそ障子ま黒く今朝の雪　呉律
お髪も家よ枝つや雪こう　ハ
化粧をね女いまちよそそ雪　ハ
蕎麦喪う声もふそや夜の雪　ハ

月さそそ後光もさそや雪佛　芦舟
つそそ竹よ書あり夜の雪　ハ
おも宮や花たあり梨あり雪の竹　夏實
そう雪い笠ま人のそうそう　ハ
雪園をふうんそう雪のそ　ハ
白壁よ行わそうそう夜の雪　如盃
園そそ月寒い凍し夜乃雪　ハ
北窓へ月さそさそや夜の雪　ハ
そそそも綿くふまよ雪女　利萬
お仏事の場よふそこそ雪の花　ハ

松竹もうつむ雪や法もとく　髪
鐘つまの数もするどや夜の雪　日
そのいろ〳〵白き声きん　雪　女　矢直
粉雪ふるやや水碓のさとのさき　日
旅宿雪とふみをはらくや雪の木曽宿　律松
美もとゞめぬ峠哉
遠郭と云題よ
一声い遠いう花よかとくきを　日

於錦綉園真行

まゆきさんをくや掃ちく庭の雪　菱定
松い年くをきそ貞　白綿
狂言合勝負ともか笑りれく　兎肝
待ゐる月も我友の数　閑里
鹿の声まくや次よ虫の聲　花翠
笠頭も穂よ出るかすゝき　千賊
あるく寺知ぬいまと竹の門　執筆
女ちめくろの若　震　翠

白き垢つき肌着洗ひ清き衣　綿
去秋をとこと皆土用干　足
風もなく何ともなき月涼し　賦
踊らぬ人もなくなります　肝
藪入や先ず芝居より盆の礼　里
風よりも軽くちる柳髪　綿
ましろねと仏のおもひよ　翠
耳ようけさいた看板の数珠　賦
様ざまくさまざまの花曇　足
待ちわびて来いくみやげ文　里

長の日も狂ひ長い身ありよ　肝
神風をふく雲の糸宮　翠
菅笠のうつとうしがる蛍売　里
給まひうつとうしがる蛍売　足
沙汰もなく夏うぐひす鳴郭と　賦
何をあてそこた痩さうな事　綿
母の乳のようにうとうとそのまま　足
京おしろいのあるふうしい　肝
夕風呂の浴衣ふり振りく　翠
ちいやしくく萩をふく風　里

洗しる松よまんまと月の新　肝
森酒の暑い鉋出の声　賦
小僧めうくくく老僧の里
杖よるうくそそそ去の竹　足
上り場のうくくく伸る舟の中　賦
心もちめよく底曇の汲　肝
貴賓よるうれうりいろの花　綿
人よおれぬ去の一時　翠

花

さく花よ心の弱をつなきうり　白綿

鄭玄

籠もく笑も高音をうくきれ　鬼肝
二声と色いきねうくきます　千賦

月

声うくく人よふ月の蟾のか　閑里

雪

きうきうや河辺寺よい猫を雪火連　花翠

柿之坊連中

制札のけとも白あやきうり　秋哉

周粉ゝ花ふ彼岸ちゝふ　在貞
遅咲い初花なのちゝこゝろ　時哉
富士見酒ふんでやそゝや江戸　長文

郭公

忘れの多白よいきふ皆代鳥　秋哉
鳥のその枕ゝゝつかゝきを　在貞
ありけかのやこ声をゝきま夜のふ　時哉
窓ゝゝ雲をのそゝや　郭公　長文
老い指ようる衆のそゝる親　貞右

月

ある山寺ま
あゝ月ご雲の庭ふ沙ふゝ　在貞
名月や庭の立石かゝゝみし　時哉
古松ゝゝゝ木ゝゝの月　長文
名月や空ゝまゝ露　氷　秋哉

雪

雪の日や自在の釈ふ鈎の糸　月
初雪や的場へちゝき襞のと　在貞
雪の椿やさゝゝを瀬のお流　時哉
初雪やタふゝし塔の釈　長文

初雪をうけいそぐ葛城山　貞右

雪の夜やあるじしらさき脚の紅　月

花

まん蝶よつゝゆくへや峯のむら　二見

月

拙入よりぬる柄や梅花　九加館　鉦永

月

新さらや下座を上座の月の客　月

雪

初雪やもさい庭をおとしぬ　月

欽仙

命をも洗濯をする花の滝　麥里

結ぶ事のさゝやき　百余

雪ある日を雪と眺めつゝ　臭里

月の夜明も東窓　太士

声いかにとゞかぬ頃のきりぎりす　蔽牛

霜よ結んで露にこぼれい　其梅

音の絶ゆる所から結ぶ　余

生のこの森の木の本中　里

仏座をうつす鏡や彫詰文　士
只有うつせき念仏の祖師　臭
婆と連ゥ茶飲咄のちゐさゐ　里
柱ゐそろやこ裏茶　牛
蓑蓑をふるい蛍死て出く　野史
ゑうう根のふうい　余
化粧坂蒙顔の君も有ものを　牛
身内ゥ紋の江戸絵也ゥ　士
木賃宿月もうつき破扉風　魚
約脚よ世界ゥ若烟茶　史

辻秋い何百の咄よいくと　余
銀なをうう踊る大入　里
開帳の世話ゥ結し無盡の後頭　魚
あの繁事もうやふ　牛
木造い人の庭木を我おゐ　史
涼風ゥよゐ蚊の細間　士
河ふい淺いこて実結羅ゥも　里
杭よゥうつき法ゥ針　臭
さうう夜待うく夜食ううく　牛
うう出ふ月よ何の挑灯　余

二條きよ子の賑ひを
今年の角力関いくいきる
拳會のあるの強い柳るよ女　余
花よ狂ふを蝶ろし人　牛
賤しきい實あり業を吹よ　士
為を学ぶ風長閑なり　里
魚荷よ家何をを祝ふん　魚
まろ孫ろ籠　史

花

灸をく待やより野の花便　蒙之

真盛りをを花もろ　歌風
蝶くの如く風情や花の浪　〃
散花の雪垣もきよ吉野人　素山
下駄や足ろ花の浪まろ　〃
酔くる人ろさや花の滝　〃
咲よろ梢い花の雪ろを　〃
下戸上戸ふ夕業や花見酒　〃
見ぬきも見て花のよ野ろ　南路
まをそ物ふしろ人先ろろ　〃
花もむ奇もいろ人ちろ書　〃

夜あきの春きそ久しの花見茶屋　几睡
二あらの寺の加持や花の雲　兎角
蛇の声虚空よるし花の雲　風虎

郭公

きつと鳥しきりやかてきを　簪枝
三声い待へもきくをかてきた　蒙之
くもる夜も耳い晴そう杜宇　歌風
叶多もおそるかあてのそ仰か　如矢
それ遅き会のなうへし
法ふそ古ふいあそう郭公　素山

耳そう寝いてもう郭公　日
待くく耳そへたそし子規　日
かとそまそ鳴来とうれい短そ夏　日
二声めそうふ少つかとそきを　倚天
かとそまたるや杜原の朝曇　五株
短夜を長う待そやかとそます　風虎
物そう夜を明よそう子規　南路
郭公待かあう安くそう　日

月

名月や雲そ山のあきそう雨　歌風

雅楽も夏ならぬ月の鏡かな　素山　日

月のみ入るをねむ人もなし　日

いつのまに入よそめの月　日

大名よりも乞食月見哉　日

蚤虱いつの月見の人も出し　五粒

名月や秤の星のよるべなり　子逸

燭臺いむさいものの座　梅暦

名月の照よる硯かな　風帋

十三七もあらん田毎のお月さま　南路

雪

初雪やけさのものと思はれを　歌風

未明よりたゝるそらや雪　女　素山

野の犬のこゑもそのまゝ雪　日

川い渡山い肥そうそのまゝ雪　日

降けずやあるも雪を夜の雪　五株

富士形のふもとまでふる夜の雪　風帋

積雪やきもをつめたう　葉舟

連咲や年の内の雪の花　日

歌仙

公わらを踏るよ道の花の気　呉律
笠うりきよの日ぐれ　如盃
あてもなき旅漬の看時を得く　丈石
新衣にふ軒ちやや川下り　利萬
桂苑よ月のおえのまくと　芦舟
耳おいくら痛ん持ム鹿　矢直
あてもなきさいもの若尻の打まわる　雪舩
待やそちよ入唐の留守　芦乙

金牡そくよのきくめき飾る　盃
著り着感陽宮をうやくく　律
かうみくまは　萬
金菊の世話つまふ世を通　石
酒の通くもうふ水窓　直
小多納足軽町の秋れや　舟
るの誓古い仕月夜　乙
法よかくも堂のお集い昼　舩
韻快かよこる雁柱尾　石
　　萬

永きりや千座の護ノの既よ海　律
蕊ふのそく藏の細間　盃
業の花よ猛者の活夜い海ぎて
銭ふるふよ仮鴈　乙
星合い八專ふ野ふふ　直
頭痛よさふ野ふふ　舟
垣間見の学へ花つくまふふを　石
猫よ声い新婦ふ女息ふ　航
冬ま木立何てふふと雪の花　乙
舟り自由よまふる前栽　萬
　　律

夕月や脇息ふふ納涼床　盃
小訳ふふ殿の浄着　舟
関札い立つせんふふ　直
又盛砂を敷またま　航
朝寒いふふあの花盛　石
寒まく掃庵の綺羅さ　律
巣よふい楽屋ふん子規　乙
ふ争も閏三月　執筆

花

花の雲吉野も都とゝへ　丈士

抱まるるまもをそや花の夏　丈士
炭木法花のうてきの酒をし　〃
見る花は腰めしもや茎立　〃

鄙ぶ

かとまきすまつや松よ河の春　〃
江戸恋て鰹よりとかとまた　〃
霞もよ春くる鄙ぶみるも　〃
はてうういつそ向も如と覚　〃

月

名月や濡うるをする水の庭　〃

冬の月人も礎石ゟ南向　〃
盃よ蚊の一ツうく月見ゟ　〃

雪

雪の日や何ようる酒林　〃
きろ見の餅雪ふるや寒の入　〃
さくおつや雪見の客の黒小袖　〃
叶雪も花よ吉野よりとふ　〃
灯籠の火も雪夜の雪　〃
唐綿のそけきものや雪の蓑　〃

歌仙

一聲ハ鴉もきろ〳〵夜の雪　雪航
早―梅　鉤―舟ニ　呉律
漏ものこす有穂氣の座鋪也　芦乙
うりやまよる主ほゝる小鼓　航
月　鑓ニ(カヽヤカヌ)　出ツ　律
頽ニ(ノウキ)　吹テ　収ル　乙
賣―猶　―　薄ヲ　航
番―匠ノ　宿ニ(ス)　拔ク　律

新地先小家うちつゞて建そろひ　乙
今更の多も暑い泉水　航
餌をせゝむ猫う記をく後の朝　律
溺ニ(ホレテ)レ目ニ　賜ヘルレ　朱ヲ　骰ル　乙
獨―禮　光ニ(アリ)　於　玉ニ(ヨリモ)　航
狂―詩　煉レリ　似　油ニ(ヨリモ)　律
有レハ花　應ニレ　入ル　盜　乙
金かのえゆる義の臆夜　航
賑うや鑓ニ(ブ)のむさうあるくうま　律
百るまくはる実の造営　乙

鄰[ナ]の名まさしき石灯籠　舷
雪の花さく森の秋苔　律
星うつぬ宇治十帖を巡見所　乙
錆―鮎
散[テ]敷[ク]ル
咲[テ]立[ツル]ル
盃もそもそもそれの長虎よ　舷
蚊帳も漏る髪の笛伽藍　律
見[セテ]ル後[リノ]前[ヲ]藏[シノ]ル
豊[フクレホナリ]分恨[オラ出ス]乙
尾也謀　舷

禱終[ツテ]
狩暮[ノ]
鐘うつ城のあなたまでも　舷
塵塚いくつ墓江の裏　律
竹拂[フ]ル雲[ヲ]禪―寺　乙
花の幻脚の云家ゝ草鞋く　舷
京良のまゝ酒の霰やとけぬらん　律
脇―能　融[トカニ]發[ス]レ謡[ヲ]執筆
狐―付走[ル]律
犬―牽休[ム]乙

傘もそろうて志ろき夜の雪　倚天
見墓も友埋火もし友　五株
出茶いくつは〳〵城下の家並　ハ
笠屐とそゝくる荷を引くる苑　天
霄月の新の更行枚挌　ハ
そゝくい萩う芭蕉う　株
張うそ障子まる秋を建出そ　ハ
あとの法事の客いくそう　天

出〳〵そそを径まい鍬のいやそよ　ハ
指そ煙壺もそ楫よ朽やそん　株
書麥の中よ圃湯神楽圃　ハ
初行そきそよ鳴　天
さい〳〵さの硯うねはそそと　ハ
待夜の命　株
若盛そも病のらそうや　ハ
うかそ〳〵と云ふ来よそう　天
月光よそれて庵のあをく　ハ
日の永いよい草外をそる　株

賜を称みてひとと称古琵琶　株
田舎よ京の面目もみ〳〵　天
旅立をおくる問屋の小風呂哉　日
仏やさよ僧の餞別　株
美業板の当りう喪いあつく　日
乃く賑やうなお神の灯　天
そそくさる板の奥の露うそ　日
秋よそろく　まるい船道　株
朝の月ろ夜の吸かけ座蒲　日
業内そろく園まの毋　天

来をかそう数そ人い賀　日
色紙の針も糸そそるもの　株
冬の日の時雨ふおそれく　日
さ〳〵もそへ表情る梅　天
この家も材木町の門遠く　日
書よあふそ種賣の哉　株
初咲の花をを向の花みそく　日
道をさへつる百よそろく　執筆

花

待そくさいそ臭そう初櫻　丈石

名月の老うくを花見哉　丈石
たゝひおく氷室もうるか花の雪　日
日土圭をたのまぬ彩や花の宴　日
吉野の花見るまゝしよ西夫うれい
雨の花よく見てく人よ成よくり　日
おそ〳〵咲やをそ掛の社まく
やまうけの花よさうん神の勢　日
桝屋月次会の日稲荷の神出うれい
花筵を折りひ神出よ守と神　日
双林もまく

うくもない人こそうけま花の蔭　日
う基寺まく
老い花友とこそ見め　娩さくう　日
三月十日にようあうて久しく語うれい
桜のうう多まあうくふまと花を見侍うを
田家のそまふけ月のあいまうのうれ
よまりうれと
姉う妻い花まうま世のうしひふ　日
　郭公
ほとまうい声やうまうの郭公　日

庚申堂法樂よ

郭公待よ今雪の深い庵の夜ふ　は

月

名月の影を見しるを鏡こゝろ　は

老ぬる後も年〳〵月見ふ　は

名所ゝゝ月見ふ　は

郭公も夜るを老しらふ月の雪　は

名月くもり多ふ　は

名見ずい降うり月の花くもり　は

十五夜の蝕よ

文月廿の雲よ入多やうくもれ　は

霖耳よいろ多るれやな規　は

なくきすゝやく日裏の遥　橋　は

夕郭公といふを

なくさを上多の鞠もそれよう　は

廂そ郭公ゆつと入よいさそて

ゆふう雨ちまのうりや郭公　は

文月十三日の歌義みある序そ豊を職る

ないかい仏るよ手うもし多夜ふ

なくまた夫数のみの数るれや　は

ゆくひもめでそうやくもの月の四　は
雨後月といふことを
ぬまさく傘もわさかいさん月夜哉　は
梢雲月次よ
月も名をとゞろいたまふ一夜ゐる　は
湖月といふ題よ
唐崎の松をとい春月夜よし　は
九月十三夜よ
照よくもりよわやかつらも紅葉月　は
象のとのゐもる夜の月後の月　は

雪
初雪のふるね所いの月哉　は
神無月十日ばかりの夜ふまてまいりしに
雪をけしかりふるふりそうとこゝろを詠く
ゆくえいれいそ真白か時雪　は
葉をそる日数ふりふり雪の跡　は
見しとふ人もとゝやゆき礫　は

歌仙

鵠（きハ）　是　招―　亀ノ　器　釣雪菴 盡七

啜るやきゆる夏の夜の霜　丈石

生―　垣　栽（テ）レ竹（ヲ）　緑　日

編―　戸　覗（ケハ）レ柑（カウジヲ）　黄（き）　乙

茶振森ろさのまゐをまちて　日

給そろ岡いまいくの商　石

暦見をそそし節供いさはよ　日

仕者いそくろやろろるの湯　乙

海―　城ノ　鐘　磬（カルル）レ　雨　日

山―　寺ノ　粥　終（ルニ）レ　暘（トヒ）　石

專（ニス）レ　欲（ヲ）　稱―　名ノ　數　日

巧（ニス）レ　偷（ニヲ）　好―　色ノ　常　乙

忘るるくまを花をる痂蝶　日

けものやくいき露う陰やう　石

須ふへ二里月のらる江義りて　乙

何ノ　笛ノ　泣（カス）―　乘（ヲ）―　相（ヲ）　日

昨る森ま辻の空嘆の花いろ　石

夏をしくや牡丹賛をる　乙

富（カラ）ノ懐。暖（エ）ハ氣（ヲ）
奢（イテ）ル向（エ）ハ上（ヲ）ヲ兄（ヲ）ト方（シ）
従者聲の愛つまい我おみ（く）
野を行娜（ヲ）船の羽杉長（く）
若鶯いそまつ（く）並木の雪さい（く）
荷（ヲ）前（ニ）今（ハ）則（レ）亡（ス）
糀（コウジ）書（ヲ）淫（ニ）硯（ノ）水（ハ）
酢（ス）酒（ヲ）癖（ニ）壷（ノ）舘（ヲ）
出以の舌い枝ありそ（く）ん
紅葉よ後急そる坊

懸（カル）レ雲（ハ）橋（ヲ）渡（ス）月（ハ）
子代の古道虫の声も荒（レ）
吸（ヒ）売（ル）薫（フスホル）ニ還（ス）幸（ヲ）ニ
喰（フ）餘（リ）溢（コホス）ニ化（ス）粧（ヲ）ニ
羊のわく猫も別おもろれく
額（クワシス）ニ花（ノ）狂（モノクルヒ）
應（ヘ）レ興（ヘナル）レ踊（ヲ）妾（ノ）
波うく（く）よりや神（ヲ）鼓（ニ）
檣（ハ）草（ハ）